



Data 2022-71

監督・脚本・ナレーション: マーク・カズンズ

出演: アニエス・ヴァルダ/チャー
ルズ・バーネット/アリ・ア
スター/シヤンタル・アケル
マン

👁️👁️ みどころ

私は年間150~200本の映画を20年近く鑑賞し続けているが、イギリスのマーク・カズンズ監督がこれまでの人生で鑑賞した総本数は、何と1万6,000作品。

そんな“365日映画を鑑賞する男”が、映画を取り巻く環境や表現手段が劇的に変わった2010~21年の11年間にスポットを当てて“厳選”した111本の映画を、167分間にわたって論評したのが本作だ。

私は111本のうち35本を鑑賞し評論しているから、興味のある人は是非本作と対比を。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ “365日映画を鑑賞する男” マーク・カズンズに注目! ■□■

小中学生時代から映画が大好きだった私は、2001年3月にホームページを開設したことを契機として映画評論を書き始めた。そして、2002年6月に『SHOW-HEY シネマルームI』を出版した後も、その出版が続き、2022年7月には『SHOW-HEY シネマルーム50』に達した。その50冊で評論した作品は、約3,500本に上っている。

それはそれですごいが、イギリスには“365日映画を鑑賞する男”、マーク・カズンズ監督がいるらしい。彼は毎日欠かさず新たな映画が追い求め、これまでの人生で鑑賞した総本数が1万6,000作品を超えるというから、すごい。

■□■ 『ストーリー・オブ・フィルム』は全編900分以上! ■□■

イギリスでは、2011年に驚くべきドキュメンタリーのTVシリーズが制作され、同作はトロント国際映画祭に出品されるなど、世界各国でリリースされた。その作品は、19世紀末の草創期から2000年代に至る映画120年の歴史を、全15章、全編900分以上という構成でたどったシリーズだ。数多くの名監督、名優のインタビューを敢行し、

膨大な数の映画の印象的なシーンを引用したこのドキュメンタリーは、映画史を新しい視点で紐解こうとする試みに加え、ユニークな作品選びや編集のセンスも評判になり、世界中の映画ファンを夢中にさせた。これが、北アイルランド・ベルファスト生まれのフィルムメーカーで作家でもあるマーク・カズンズ監督が、制作に6年の歳月を費やし、映画に関するありったけの知識と愛情を注ぎこんだ画期的なシリーズだ。

そんなマーク・カズンズ監督が、めまぐるしい社会の変化、テクノロジーの進化とともに、映画を取り巻く環境や表現手段が劇的に変わった2010年から2021年の11年間にスポットを当てて完成させたのが、シリーズ最新作『ストーリー・オブ・フィルム 111の映画旅行』。劇中に登場する111本の映画はハリウッド・メジャー大作からアートハウス系、知られざる日本未公開作まで実に幅広く、取り上げるジャンル、テーマも多種多様。「映画をもっと深く知りたい」「未知の映画を発見したい」と願うすべての観客を、壮大な冒険旅行へと誘う“フィルム・ドキュメンタリー”だ。

■□■全編マーク監督のナレーションで！その視点に注目！■□■

本作は167分の中で111本の映画を評論する映画だから、かなり忙しい。そこで、第1の問題は、何を基準に111本を選んだのかだが、それは受賞歴や興行成績、さらにベストテン等の選択基準ではなく、あくまでマーク・カズンズ監督の視点だ。そのため、よく言えば、彼の映画鑑賞眼による選択、悪く言えば、彼の独断と偏見による選択だ。第2はそれをいかに批評するかだが、本作に見るそれは彼のナレーションと111本の映画の各種シーンの活用だから、彼の語りの視点に注目！

しかして、本作の最初に登場するのは、世界的に有名な『JOKER ジョーカー』（19年）（『シネマ46』20頁）と『アナと雪の女王』（13年）（『シネマ33』未掲載）。そして、そこで彼が解説するのは、一見何の関連もない2作品が、実は“解放”というキーワードで共通していること。なるほど、なるほど、そう解説されれば・・・。

本作は、第1部<映画言語の拡張>、第2部<我々は何を探ってきたのか>という、2部構成で、規制概念にとらわれず、革新的な映画表現を実践した映画を検証していくので、全編を通じて興味深い。私の尊敬する浜村淳さんの映画の語りは絶品だが、さて本作に見る彼の評論の視点は？もっとも、167分間ずっと彼のナレーションを聞き続けていると、いい加減、飽きてくる感も・・・。

■□■111本のうち、私は35本を鑑賞し、評論書き！■□■

2010年から2021年の11年間にスポットを当ててマーク・カズンズ監督が選んだ111本は、冒頭の2作品をはじめとして、『ゼロ・グラビティ』（13年）、『ムーンライト』（16年）、『万引き家族』（18年）、『百年恋歌』（05年）、『パラサイト 半地下の家族』（19年）、『猿の惑星：聖戦記（グレート・ウォー）』（17年）、『スパイダーマン：スパイダーバース』（18年）等のように、超有名な作品も多い。しかし、他方で中国映画、『象は静かに座っている』（18年）、チリ映画『チリの闘い』（75～78年）、イタリア

映画『幸福なラザロ』（18年）等、世間あまり知られていない作品も多い。もちろん、私が観たことも聞いたこともない映画もたくさんある。

しかし、パンフレットのラストに収録されている111本を1つずつチェックしてみると、そのうち35本を私は鑑賞、評論書きしているから、私もすごい。その35本については、本作でマーク・カズンズ監督がナレーションで解説していることと、私が『SHOW-HEY シネマルーム』1～50で評論していることを、是非対比してもらいたいものだ。

2022（令和4）年6月17日記